

北海道大野農業高等学校

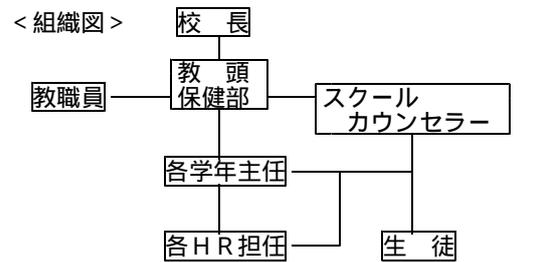
課程 全日制
学科 農業科
生徒数 368名

1 取組の特徴

- 1 エゴグラム性格検査や学級適応検査「アセス」、子ども理解支援ツール「ほっと」の結果などによる、生徒状況の把握と学年別生徒理解会議の実施
- 2 農業高校の特色を生かした販売会や異年齢交流等の活動を通した、コミュニケーションスキルや自己肯定感の向上
- 3 スクールカウンセラーと教員のコンサルテーションによる生徒状況の把握

2 取組のねらい

中学校より人間関係をうまく築くことができない、集団生活での不適応、不登校、心的な悩みを抱えている生徒が多く見受けられることから、生徒のコミュニケーション力や自己肯定感の向上を促す教育活動をめざす。



3 取組の経過

- | | |
|--|---|
| <p>5月 学級適応検査「アセス」の実施
第1回大野幼稚園との交流会
第1回特別支援学校との交流会
高齢者との草花交流
学年別生徒理解会議</p> <p>6月 1学年エゴグラム性格検査の実施</p> <p>7月 アンテナショップ「鹿島屋」開店
(~11月)
第2回大野幼稚園との交流会
第2回特別支援学校との交流会
学年別生徒理解会議</p> <p>8月 子ども理解支援ツール「ほっと」の実施(1回目)</p> <p>9月 第3回大野幼稚園との交流会
第3回特別支援学校との交流会</p> | <p>10月 老人ホーム「美ヶ丘」収穫感謝祭ボランティア
食彩フェア販売会
緑園祭販売実習
学年別生徒理解会議</p> <p>11月 交通安全事故なしキャンペーン</p> <p>12月 サンタクロース活動</p> <p>2月 子ども理解支援ツール「ほっと」の実施(2回目)
ソーシャルスキルトレーニングの実施
1学年宿泊研修「進路に関わるソーシャルコミュニケーションワーク」の実施
スクールカウンセラーによるコンサルテーション(適宜)</p> |
|--|---|

4 取組の内容

1 緑園祭生産物販売実習

- (1) 実施日 10月28日(日) 9:00～14:00
- (2) 対象 全学年
- (3) ねらい 生産物販売を通して、地域の人々との交流を密にし、コミュニケーション力を向上させる。
- (4) 内容 実施日の約一ヶ月前から、各学科で販売品目の検討・準備を行い、実際の販売についても各学科ごとに行う。



- (5) 成果と課題（ は成果、 は課題）

販売活動を通して、他者とのコミュニケーションを経験することにより、生徒は自分の仕事に生き生きと取り組んでいた。

生徒が販売活動の経験や学んだことを日常の学習の中で生かすなど、事前指導、事後指導のさらなる充実が必要である。

2 大野幼稚園～園児との交流会

- (1) 実施日 5月22日(火)、7月17日(火)、
9月18日(火)、10月19日(金)
- (2) 対象 生活科学科2年及び3年
- (3) ねらい ジャガイモの播種、観察、収穫、調理の実習を幼稚園児に体験させる活動を通して、作物栽培への責任感を持たせるとともに、保育の学習と関連させ、幼児の特性や接し方を体験的に学ぶことで、生徒のコミュニケーションスキルの向上を図る。



- (4) 内容 5月のジャガイモ播種、7月のジャガイモ観察、9月のジャガイモ収穫、10月ジャガイモを使った調理実習などを通して園児とふれあい、園児の食育活動の観察補助をする。

- (5) 成果と課題（ は成果、 は課題）

生徒は、交流活動を通して幼児の特性と接し方を体験的に学び、今後の自分の人生設計を考える上での貴重な機会となった。

次年度へ向けて内容を改善してより良い活動実践にしていきたい。

3 「ほっと」の分析結果

- (1) 日時 8月20日(月) HRの時間を使って実施
- (2) 対象 全学年
- (3) 検査の分析結果

ア 全道平均とクラス平均の比較

全学年とも、ほぼ全道の平均と同じ傾向であった。

イ クラス内の男女の比較

1 学年は各クラスとも男女差が大きく、特に「挨拶や感謝」、「思いやり」、「賞賛」の項目に開きが見られた。2 学年は「思いやり」、「賞賛」、「相談」で男女差が見られた。

3 学年はクラス共通のものが見られなかったが、全体的に男子の方が前向きに学校生活を送っている様子がうかがえた。

ウ 「緊張」の程度

各学年ともクラス共通の結果は見られず、また、数値において学年間で著しい違いはなかった。

5 次年度に向けて

1 成果

(1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者数、不登校生徒数には大きな変化は見られていない。

(2) その他の指標による評価

保健室利用者数や1人あたりの欠席日数は減少している。

ボランティア活動の参加者数に大きな変化は見られていない。

(3) 子ども理解支援ツール「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

1 学年と2 学年で共通して「思いやり」と「賞賛」に男女差が見られ、「困っている人のために思いやりのある行動をとることができる」、「友達を励ましたりほめたりすることができる」ことに消極的ということは、自分の行動に自信がないことの表れではないかと推察され、自己肯定感の低さがコミュニケーションスキルの向上を妨げていると思われる。

(4) 生徒の変容した姿

ア 本校では、農業高校の特色を活かすとともに、これまでのボランティア活動の伝統を継承して、交流活動による実践を積極的に行っており、入学当初の生徒はこうした教育活動に戸惑っているものの、上級生になるに従って自分のやるべきことを理解し、意欲的に取り組む生徒が増え、こうした取組を通じて、生徒のコミュニケーション能力や自己肯定感の向上につながっていると考えられる。

イ 昨年度に比べて、学校生活を前向きに考えている生徒が増えるとともに、学校生活がスタートした4～5月に比べて、かなり落ち着いた学校生活を過ごすようになった。

2 課題

(1) 中学校やカウンセラーなどからの生徒の情報や学級適応検査の分析結果を収集し、個に応じた具体的な指導方法を検討するなどして、引き続き学校生活不適應の解消を図るとともに、社会人として通用するコミュニケーションスキルの向上を図る必要がある。

(2) 入学当初から高校生活に意欲を持っていない生徒に意欲を持たせるため、学習や進路、部活動など様々なアプローチからの指導の充実を図る必要がある。

3 次年度に向けて

(1) 生徒自身がより意欲的に取り組めるよう、交流活動の内容の改善・充実を図る。

(2) 学級適応検査の有効な活用方法を検討する。